



大阪商業大学
FD ニュースレター

第 23 号

2022 年 3 月発行

C O N T E N T S

1	公開授業と意見交換会	1
1-1	公開授業の概要	1
1-2	意見交換会の概要	1
1-3	公開授業を終えて	2
	「マクロ経済学」 檜康子（経済学部経済学科 専任講師）	2
	「農業経営論」 藤井至（経済学部経済学科 専任講師）	4
	「消費者行動論」 金度渕（総合経営学部商学科 准教授）	7
	「現代経済Ⅱ」 西嶋淳（経済学部経済学科 教授）	9
	「観光政策論」 大島安奈（公共学部公共学科 専任講師）	12
	「財政学Ⅱ」 鎌苅宏司（経済学部経済学科 教授）	16
	「社会調査入門」 宍戸邦章（公共学部公共学科 教授）	18
2	授業アンケート	20
2-1	実施方法	20
2-2	対象科目	21
2-3	アンケートの内容	21
2-4	教員からのフィードバック	21
2-5	結果の開示方法	21
2-6	今後の展望	21
	「授業序盤での授業アンケート – マナビコースのアンケート機能を利用した雛型の紹介 –」	
	宍戸邦章（公共学部公共学科 教授）	22
3	FD研修会	24
4	大学院FD活動	25
	「『2021年度 修士論文中間報告会』開催される」	
	初谷勇（大学院地域政策学研究所 教授）	
	和田伸介（大学院地域政策学研究所 教授）	
	《編集後記》	26

1 公開授業と意見交換会

1-1 公開授業の概要

本学において毎年行われる公開授業は、教員がお互いに授業の運営方法や工夫について学ぶ機会を持ち、その結果を各自の授業運営に活かしていくことを目的としている。今年度は後期第8回目授業にあたる2021年11月16日（火）～19日（金）に、オンライン授業2つを含む7つの授業科目を対象に行われた。

公開授業の対象となる授業科目は、その年度の新任教員が担当するもののほか、授業内容や受講者数などを勘案して選出されている。今年度の公開授業の対象となった授業科目と開講日時、教室は下表のとおりである。

月日	時限	科目名	担当教員	教室
11月16日（火）	4	マクロ経済学	檜 康子 （経済学部経済学科 専任講師）	421
11月17日（水）	2	農業経営論	藤井 至 （経済学部経済学科 専任講師）	624
	3	消費者行動論 （オンライン授業）	金 度淵 （総合経営学部商学科 准教授）	623
11月18日（木）	3	現代経済Ⅱ	西嶋 淳 （経済学部経済学科 教授）	951
	4	観光政策論	大島 安奈 （公共学部公共学科 専任講師）	431
11月19日（金）	1	財政学Ⅱ	鎌苅 宏司 （経済学部経済学科 教授）	412
	3	社会調査入門 （オンライン授業）	宍戸 邦章 （公共学部公共学科 教授）	623

各授業では、興味深い点や参考になる点などについて、参観教員が自由記述形式で回答するアンケート〔提出期限：2021年11月30日（火）〕が実施された。

1-2 意見交換会の概要

2021年12月1日（水）16:30～17:30に本館6階の研修室において、公開授業担当教員と各授業の参観教員による意見交換会が開催された。公開授業担当教員と参観教員、FD委員の計16名が参加し、公開授業検討ワーキングの森田学准教授による司会進行で次のとおり行われた。



意見交換会の様子

<会次第>

1. 開会挨拶（FD委員会委員長 西嶋淳教授）
2. 公開授業担当教員による公開授業に関する報告と参観教員による感想や意見の交換
3. 総括と閉会挨拶（公開授業検討ワーキング 森田学准教授）

1-3 公開授業を終えて

公開授業を担当した7名の教員には、意見交換会で報告した授業における工夫や苦心、公開授業を終えた感想、アンケートや意見交換会で出たコメントに対する回答などを文章の形でまとめてもらった。以下はその文章である。(公開授業実施順)



「マクロ経済学」

檜 康子

(経済学部経済学科 専任講師)

1 はじめに

「マクロ経済学 (11月16日火曜日4限)」の講義を公開授業として行いました。本科目は2回生が対象の通年科目であり、同一の授業を他の曜日にも開講しています。それぞれ110名程度が履修しています。受講生の多くが経済学部の2年生となっています。

「マクロ経済学」は個別の経済主体(個人や企業など)よりも社会全体(一国全体)の経済を分析対象としており、経済学の中でも基礎となる科目です。1年生の時に学習した「マクロ経済学入門」を踏まえて、マクロ経済学をより詳しく学んでいく授業となっています。公開授業の回ではIS-LMモデルと呼ばれるマクロ経済のモデルを利用して、財政政策や金融政策の効果について解説を行いました。

2 授業運営上における工夫

前期の授業はコロナ禍のため、初回を除きオンライン授業となりました。後期は授業時間を短縮しつつも対面授業として行っております。

授業の基本的構成は、①授業資料の事前掲示、②復習も兼ねて前回の課題に関するコメントと解説、③当該回の要点の講義、④練習問題を中心とした課題の掲示、となっています。

公開授業の前の回で学生に課題を提示しました。その課題から理解が不十分な箇所が何点か見受けられました。そのため、最初に学生の理解不足の部分を詳しく解説することとしました。さらに、それを踏まえた要点講義を行いました。他の授業回よりも復習と質問事項の解説に時間を割いた授業となりました。

授業資料として、授業で使うスライド等は原則 **manaba** に掲示しております。本来であれば、スライドの中で重要なキーワード等を穴埋めにすることや作図用のスペースを設けるなどして、授業中に受講生に記入させたいところです。ただ、コロナ禍の授業であることもあり、体調不良による欠席の学生に配慮し、完成形を **manaba** に掲示しています。また、授業資料にはテキスト参



照箇所を明記し、学生が授業資料とテキストを読めば理解できるような資料作りに努めています。

この科目では、図や中学レベルの数学を用いて説明することも多くあります。内容を理解するためには、自分で手を動かして確認するという作業が効果的であると考えられます。90分授業であれば、解説をしながらグラフを作成し、ノートに描き込ませるという作業時間が取れますが、時間的にも難しいのが現状です。この点について



は、練習問題として手書きでグラフを作成させ、その写真を manaba の「レポート」で提出させることで対応しています。グラフの作成を課題とすることで、少なくとも一度は自分でグラフを描くことになり、学生の理解につながると考えたためです。また、計算問題についても、解答だけでなく簡単な計算過程も書き込ませるようにすることで、思考プロセスの確認を促しています。

また、この課題については、次回の講義の冒頭に復習の意味も兼ねてコメントと解説を行っています。

3 今後の課題と公開授業へのコメント

先述したように、授業資料としては穴埋めやグラフ部分について完成形を掲示しています。このため、授業時間にメモやノートを取ることなく、単に聞いているだけといった学生がいるなど、学生の集中力の低下につながっている可能性があります。この点については、授業資料のあり方や授業運営について工夫する必要があると感じています。

公開授業へは以下のようなコメントをいただきました。

- ・「課題に取り組んでいることを前提に、その解説を丁寧に行う授業スタイルであり、参考になった」

【回答】短縮授業であることから、フィードバックにかける時間も限定的になってしまいます。今回は区切りの良い回であることから、課題から確認できる学生の理解度が低い部分、質問事項の解説を中心としました。

- ・「レーザーポインターでスクリーンを指していたが、吊り下げモニターを見ている学生には伝わりにくい」

【回答】ご指摘を受け、どの画面にもポインターが表示されるソフトウェアポインターの仕様に切り替えました。また、図中の細かい説明には、スライドにアニメーション機能等を効果的に利用するなどの工夫をしていきたいと思っております。

- ・学生の受講態度に関して、例えば、寝ている、スマホをする、何もしない学生がいる、といったご指摘をいただきました。

【回答】スマホについては、資料を manaba に掲示しているため、授業資料をプリントアウトせず、

スマホ画面で確認している学生もいると考えられます。この点については資料をプリントアウトしておくように指導を徹底していきたいと思います。また、集中力を欠いている学生については、先述したように、配布資料の図などが完成形であることも影響していると考えられますが、学生の習熟度を確認しながら対応していきたいと思います。

4 さいごに

ご多忙の中、先生方や職員の皆様には公開授業にご参加いただき感謝申し上げます。公開授業後のアンケートと意見交換会では貴重なご意見をいただきました。反省点を含め、今後の授業に活用していきたいと思います。



「農業経営論」

藤井 至

(経済学部経済学科 専任講師)

1 はじめに

2021年4月より本学に着任し、「農業経営論」を担当しております。この度は、公開授業という貴重な機会をいただきありがとうございました。ご参加いただいた先生方からも興味深いご意見をいただきましたので、今後の授業運営において参考にさせていただきたいと考えています。この場を借りて改めてお礼を申し上げます。

以下では、農業経営論の授業の概要を簡単に説明したうえで、授業運営における工夫点、意見交換会やコメントを踏まえた今後の検討事項について記述させていただきます。

2 授業の概要

農業経営論では、私たちが生活していくうえで必要不可欠な食料について、生産している農業の経営実態や課題、生産動向を通じて学ぶとともに、農業経営の理論や仕組みについても理解してもらうことを主な目的としています。

全15回の授業構成は三部構成で考え、第一部は農業経営・農家経済とは何か、第二部は農業生産をめぐる部門別動向と特徴、第三部は農業経営組織の運営（組織の組み立て・診断改善・マーケティングなど）で構成しています。

公開授業を行った第8回授業では、「農業生産をめぐる部門別動向と特徴 一畜産経営一」というテーマから、①日本における畜産の位置づけ（乳用牛・肉用牛・豚・鶏の基本情報と消費動向）、②畜産経営の近年の動向（飼養戸数・労働時間など）、③畜産経営の経営実態（酪農経営の一日・酪農経



営の作業工程動画) について授業を行いました。

なお、第二部の農業生産をめぐる部門別動向と特徴では、畜産のほかに、稲作、野菜作、果樹作、工芸作(主に茶作)についても授業を行っていますが、学生がそれぞれの部門を比較して考えることができるよう、①日本における当該部門の位置づけ、②経営の近年の動向、③経営実態という流れを統一しています。

3 授業運営における工夫点

3.1 一回の授業構成について

農業経営論の授業では、授業の一週間前に授業資料と事前の予習課題(満点1点)を manaba にて提示し、授業の二日前(月曜 9:00)から一日前(火曜 17:00)まで、事前の予習課題の提出と授業資料への質問を manaba にて受け付けます。対面授業(水曜 10:40)にて授業資料の解説を60分行った後に、二日後(金曜 17:00)まで、事後課題(満点3点)の提出を manaba にて受け付けます。この流れで一回の授業を構成しています。



対面授業の受講を推奨してはいますが、学生のなかにはオンラインで受講したいというニーズもあるため、オンラインでも完結できるように、授業資料および成績に関わる課題はすべて manaba を通じて配付・回収を行うようにしています。また、資料作成についても、授業資料を熟読すれば内容を理解できるように心がけています。

3.2 授業資料について

授業資料の作成においては、熟読すれば内容を理解できるよう心がけています。文字を羅列するだけでは理解することが難しく、学生の興味も薄れてしまうため、写真や図・イラストを用いながら、なるべく「です・ます調」のやさしい表現を用いるようにしています。

なお、授業資料は、どの媒体においても文字がずれることなく同様に確認できるように、必ず「PDF ファイル(Word 作成)」で配信しています。対面授業に参加している学生の受講方法を見ていると、スマートフォンでファイルを開きながら受講する学生が多く、オンラインでの受講生もおそらくスマートフォンでの受講であろうと想定して、PDF ファイルでの配信を行っています。

また、授業資料の最後には、「ちょっと小話…」というコラムも設けています。各回のテーマに合わせて、授業で取り上げるほどではないものの、知るとおもしろい知識を参考程度に記載しています。事後課題を学生が提出してくる際に、このコラムに触れた内容を提出してくる学生もおり、理解を深めるために役立てられていると認識しています。

3.3 対面授業について

対面授業では、オンラインで受講している学生との情報量に大きな差が出ないように、対面授業用に別途 PPT 資料を作成することはせず、事前に manaba にて配信している授業資料をスクリーン投

影しながら授業を行っています。

一方で、私的な想いではありますが、対面授業に出席している学生に対しては、一つでもよいので何か「気づき」を得て帰ってもらいたいと考えています。そのため、なるべく明るい口調で身振り手振りも交えながら親しみやすく、「なんかおもしろい」と学生が思えるような授業運営を心がけています。

この点については、公開授業に出席された先生方からも「心地よい関西弁の語り口で、懐かしく親しみやすい話し方であった」「先生の話し方（明るい声でテンポ良く）も大変参考になりました」とコメントいただきましたので、今後も意識していきたいと思えます。

3.4 動画の利用について

食料は生活において必要不可欠なものであるにもかかわらず、その生産現場を把握している学生は多くありません。そこで、農業経営論の第二部（農業生産をめぐる部門別動向と特徴）では、生産現場の動画を活用し、農業経営の実態についてイメージを膨らませてもらうようにしています。

使用する動画については、オンラインで受講している学生にも配慮し、YouTube などインターネット上で配信されている動画を活用しています。主に、農林水産省や JA といった公的機関やそれに準じたもの、または法人が作成した授業に適していると判断できるものを活用するようにしています。

なお、インターネット上で公開されていない動画（DVD など）を活用し授業を行う場合には、事前に授業資料にて対面授業に出席するよう案内しています。あわせて、当日体調不良などで出席できなかった学生のために、別途、課題を用意している点も伝えるようにしています（ただし、あくまでも特別措置であり、欠席の場合は課題の数に差が出ることも事前に知らせています）。

動画の利用に関しては、公開授業に出席された先生方から「動画でリアルに学べてよかったです」「動画資料が用意され、学生が退屈しないように工夫がされていた」とコメントいただきましたので、今後も続けていきたいと考えています。

4 おわりに ―今後の検討事項―

12月1日の意見交換会や公開授業に出席された先生方からのコメントを受け、以下の二点について、今後検討していきたいと考えています。

一点目は、課題提出を完了している学生数が授業回数を経るにつれて減少していった場合の対応策についてです。今期の農業経営論においては幸いそのような状況にはありませんが、意見交換会においてご指摘いただいたため、そのような状況に陥った場合の対応策を今後検討しておく必要があると実感しています。

二点目は、聞くだけ、見るだけで終わらない、何か1つでも作業をさせる授業運営についてです。これは公開授業に出席された先生方からのコメントにあり、早速、実践（穴埋めのレジュメを配付し考える時間をとり、一定時間経過後に解説・答え合わせを行う）を試みましたが、課題の提出内容から、学生たちは穴を埋めることに必死になり、学びにはあまりつながっていなかった印象を受けています。この点についても今後の改善課題とし、よりよい授業運営を検討していきたいと思えます。

「消費行動論」

金 度 渚

(総合経営学部商学科 准教授)

1 はじめに

今回、公開授業にあたり、「オンライン授業」への取り組みの現状とそこでの課題について共有する機会を得た。ただ、筆者自身は教育学の専門でもなく、また、どのような形で公開授業へ臨むのかを何度も熟慮せねばならなかった。しかし、2年にわたるコロナ禍で諸先生方とやり取りしたことや、2、3、4年ゼミ生とのやり取り、そしてオンラインゼミの運営を通じた筆者なりの現状と課題をベースに、オンライン（オンデマンド）授業の教材づくりに関する内容を報告することで、貴重な意見をいただく機会となった。この場を借り感謝を申し上げたい。

2 オンライン（オンデマンド）授業の取り組みについて

2.1 講義資料の提示内容と種類

講義資料は基本的には PDF ファイルと音声データファイル（以下、音声データ）の2種類を提示している。音声データとは、PDF ファイルの内容を筆者が解説した音声データである。

音声データを提供する理由は、第1に文字ベースの授業資料を解説することで、対面授業の感覚を提供したかったからである。実際、学生の一部からは「歩きながら聞けるからいい」という声が授業アンケートなどであったようで、作成に手間をかけてきた苦勞が報われた感じであった。ただ、各授業における音声データ視聴の割合を確認すると、全体の3~4割程度と低い結果であった。おそらくは、後述する「課題」を取り組むためには PDF ファイルだけで事足りる、ということを知っているからではないかと推察する。音声データについて、いわば、視聴しなければならないという「強制力」を課しておらず、その理由は次にあげるファイルデータの大きさに関連している。

音声データを採用する第2の理由としては、対面授業とオンライン授業が切り替わった場合でも、すぐに教員が対応できるとともに、学生たちにとっても「いつでも聞ける」状態を保てるからである。すなわち、動画ファイルや動画リンクだと、どうしても学生にとってはアクセス容量への負担が増すため、比較的小さい容量で済む音声データを採用している。ちなみに、正確に測ったわけではないが、音声データ MP3 ファイル 30 分で 40 メガバイトほどとなるので、一緒に学生に提示している文字データの PDF ファイルの分を含めて考慮すると、それを超えられない（manaba アップロード上限は 50 メガまで）。

さて、音声データで解説する内容だが、講義資料の（最低限の）「基本的な」授業説明となっている。その理由は、音声が長いとファイルの大きさが大きくなるばかりか、学生が「長いと聴かない（ゼミ生より複数名回答）」ようなので、できるだけ事例による解説は1つ程度にとどめている。そのため、補足説明が必要となったときには音声データを追加でアップするようにし、学生へ配信、manaba のニュースなどで知らせている。ちなみに、manaba を通じたニュース配信を「受信しない」に設定している学生が散見されるので、重要度の高いものについては、S-Navi で同時配信するようにしている。さらに、学生との連絡のやり取りは、manaba の個別指導（コレクション）と教員のフリーメール、ゼミではさらに Google Classroom（後述）も活用して、教員からの連絡共有だけでな

く、ゼミ生たちの発表資料のアップロードにも使用し、ゼミ全体で共有できる環境づくりを心掛けている。

2.2 課題の提示について

課題としての小テストは第2回目授業から毎回実施している。それは授業資料をよく見れば解答できるレベルである。問題には音声データで例示したものをあげることもたまにはあるが、ほとんどは音声データと関連付けることはせず、文字データ講義資料から出題している。音声データを関連付けない点については、「課題への取り組みをかなり期限ぎりぎりで行う学生も多い（ゼミ生より複数名回答）」ようなので、学生の負担軽減のためでもある。今後関連付けるかどうかは検討していきたい。

また、15回目の授業回においては「復習テスト」を用意し、これまでの小テストの中からのピックアップ問題とともに、実際に消費者行動論（他の授業も）を学んだうえでの「理解度チェック」としてのチェック問題の出題を予定している。チェック問題とは、例えば、「授業内容において、買い物の際、お店側の商品の選択肢は少ない方が良い、という調査結果がありました。では自分がお店側の人として、どのような商品をどのような選択肢で販売してみたいですか？ その選択肢の数と種類を決め、そのようにした理由も考えてみましょう」など、学生が授業で学習した内容をアウトプットできる問題作りを考えている。教員の講義インプットだけでは理解度を測るに不十分なので、学生の考えが生まれ、アウトプットできる問題を促すことで、「考える」課題への取り組みを促していきたいと考えている。

小テストの取り組みのタイミングであるが、授業開始とともに再生する音声データ視聴時から取り組めるようにしている。これは、講義内容へ集中させるためであるが、授業時間が90分から60分へ切り替わったこともある中で、学生の集中力を高めるために行っている。タイミングについては学生からは高評価のようだが、多くの学生が下を向いている状況であるので、改善策が必要となる。また、小テストの提出期限は3日間としている。いくぶん短いように思われるが、学生からの話として「多くの授業で課題があるのでつい忘れた」など、長く設定していても忘れてしまうようなので、そのように設定している。基本的には授業中の取り組みで終わるように促している。

2.3 オンライン授業から対面授業へ変更された際の対応について

とりわけこの2年間は急な授業形式の変更を余儀なくされてきたわけだが、オンライン授業から対面授業へ急に変更した際にも、上記の音声データは学生たちに視聴してもらっている。大学に来られない学生と公平性を保つためでもあるが、理由はいくつかあげられる。第一に、授業中、音声データの再生とともに教員からスライドごとの補足説明を行う（行わない場合もある）ことで、より授業内容の充実が図れる。つまり教員の言い間違いや重複説明（時間の無駄）がほぼないからである。第二に、対面授業の際には授業内容にかかわる「動画」の視聴も音声データ後にあるので、



オンライン授業運営に関する説明会の様子

授業の時間配分を計算しやすいからである。動画視聴は対面授業のメリットとして大きいことを学生に伝え、大学に来づらいと思っている学生たちに大学に来てもらう手段として活用している面もある。

3 今後の課題

昨年度、今年度とオンライン（オンデマンド）授業が生じ、その対応について諸先生方同様、筆者も試行錯誤の繰り返しであった。その中で比較的有意義な方策だと思ったことや課題は以下のとおりである。

まず、例えばゼミ生たちに遠慮なく意見が聞ける体制（例えば、manaba のアンケート機能）を整えておくと、学生の事情がうかがえる場合が多い。ゼミなどで何度もアンケートを取りながらの現状把握も行うことができた。もちろん場合によっては、ゼミでは希望者に対して教員と 1 対 1 の Zoom 相談会を実施（今年度は 5 名）し、学生が悩みなどをため込まない仕組みづくりを心掛けてきた。

次に、ゼミ生とは manaba だけでなく、Google Classroom（教員と学生とやり取りできるアプリ）を通してコミュニケーションをとってきた。その理由は第一に、残念ながら manaba をあまり見ない学生がいるようで、その理由として授業資料の分量と課題が多く、見るときは一気にためてみるようである。このことが結果として確認の遅れや見逃しの原因につながっているようである。第二に、アプリの使いやすさである。教員が掲示板にメッセージを送れば、それが学生の大学メールではなくプライベートメールの方にすぐ届くので、見てくれる頻度が比較的に高いようである。もちろんそれでも見ていない学生はいるので、完全ではないにしても、大学メールとプライベートメールとの隔りがあるのは確かである。その隔りをどのように埋めていくのかは今後の課題となる。manaba の個別指導（コレクション）は学生にとって良い機能だそうだが、授業資料の分量が多すぎる（資料の枚数が多い、という意見が多かった）とか、たまに長い文章で指示を投稿する教員がいるので返事に困ることもあり、結果として確認をしながらも返事ができないようである（いわゆる既読スルー）。

オンライン授業で心掛けているのは、学生目線の対応を比較的重視し、①授業資料の文章は（できるだけ）手短かに簡素に作成して学生に提示する、②小テストなどで学生のアウトプットする仕組みづくりをし、提出期限の短縮化を目指す、③お互い「負担のない」コミュニケーションできる環境づくりを目指す、ことである。学生一人一人への丁寧な対応（丁寧な返信）は今後も不可欠であるものの、講義資料を学生がしっかり消化できるような環境や仕組み作りを今後も考えていきたい。



「現代経済学Ⅱ」

感染症拡大防止対策下におけるグループワークの活用

－ 1 年生必修の主専攻科目のケース－

西嶋 淳

（経済学部経済学科 教授）

1 はじめに

新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、いまだ授業に関しても一定の活動制限が続く中

で、私の担当する「現代経済Ⅱ」はグループワークを活用している講義科目であることから公開授業の対象になりました。開講曜日時限は木曜3限で、先生方には第8回の対面講義を参観していただきました。

また、今年度は授業支援システム manaba（以下、「manaba」と省略します。）に「公開授業」コースも特設されました。グループワークにかかわる一連の授業の流れなども知っていただくため、科目の概要や授業運営に関する資料、関連する授業の教材を掲示するとともに、グループワークで使用する「プロジェクト」機能を用いてデモ用のプロジェクトを設け、多くの先生方に閲覧していただきました。

改めて、紙面を借りてお礼を申し上げます。

2 科目の位置づけとグループワークの導入

2.1 「現代経済Ⅱ」の位置づけ

経済学科の主専攻科目においては、1年生が入学までに興味・関心を持った経済に関する部分的な知識などを比較し関連づけていけるように、3分野6科目の基礎科目（必修）が配置されています。このうち、経済事情・政策分野の科目が「現代経済Ⅰ」（前期）と後期のこの科目で、ともに現代社会の動きを見つめ直すことで経済についての理解を深めてもらうことを意図しています。



「現代経済Ⅰ」では、現代社会の重要な動きをいくつか取り上げて紹介し、消費、生産、国・地域経済、貨幣、金融、生産要素、政策の観点から特徴について解説しています。この科目では、まず社会の変遷、地域社会や市場の実情を概観して現代社会が抱える諸問題について解説し、問題の緩和に役立つ道具として経済学の学びの体系を紹介しています。そのうえで、産業、地域間格差、環境を題材に、グループワークも活用しながら社会が抱える問題の緩和を経済面から探る方法について講義しています。

なお、授業内容は、基礎理論分野の基礎科目である「マクロ経済学入門」（前期）、「ミクロ経済学入門」（後期）との連携も深めており、これらの科目のテキストをこの科目でもテキストに加えています。

2.2 授業運営の特徴

基礎科目の特性上、経済学科の1年生向けには4クラス（「現代経済Ⅰ」「現代経済Ⅱ」共通）が編成されており、2021年度の担当クラスの後期の受講者は87名です。必要と考えられる感染症拡大防止対策を踏まえて対面講義以外は manaba を利用することとし、教材の事前提示を前提に、受講準備（予習）、対面講義（解説等）、課題への取り組み（復習の一部）という一連の授業構成を採用しています。

各回の授業の基本的な流れは以下のとおりで、グループワークを実施する第7回・第10回・第13回については、その取り組み状況を④に代わるものとして成績評価に反映させています。

- ① manaba「小テスト」画面での教材・指示事項の事前提示（事前配信）
- ② manaba「小テスト」画面での指示事項への回答・質問の受付
- ③ 所定の教室での対面講義
- ④ manaba「小テスト」画面での課題の提示・解答受付

曜日・時刻	提供場所・内容		所定の教室	「プロジェクト」画面	「小テスト」画面	
			対面講義	意見交換(グループワーク)	課題の提示・解答受付	教材・指示事項の事前提示 指示事項への回答・質問受付
第6週	月	9:00				
	火	17:00				第6回授業の受講準備
	水					
	木	13:00	第6回講義		第6回授業の課題と次回教材	
	金	17:00				
第7週	日					
	月	9:00				第7回授業の受講準備
	火	17:00				
	水	13:00	第7回講義	意見交換A		次回教材
	木	17:00				
第8週	金					
	日					
	月	9:00				第8回授業の受講準備
	火	17:00				
	水	13:00	第8回講義		第8回授業の課題と次回教材	
木	17:00					
金						
日						

意見交換を行う回の前後の授業構成例（第6回～8回）

2.3 グループワーク活用の意義と工夫

経済問題について自分で考えることができるように、経済学特有の思考方法や接近方法の重要性に気づいてもらい、基本を身につけてもらううえでは、基本的な情報の提示、参考となる考え方や分析例の紹介、探究を体験する場の提供などを組み合わせることが有用ではないかと考えています。そのため、この科目の中盤以降では、産業、地域間格差、環境の各題材について、それぞれ、基本的な情報を提示する授業、関連情報を補足しグループワークを実施する授業、自身の考えの文章化を促す授業、の3つを組み合わせた授業構成を採用しています。

ただし、感染症拡大防止の観点から対面中心のグループワークは時期尚早と判断し、直接的な狙いは、同じ課題に対する他の受講者の考えや意見を知る機会の提供に限定しました。基本的には、西嶋（2020）で紹介したグループワークと同様に、manaba「プロジェクト」機能を使用して所属グループの「チームスレッド」画面において「コメント」（考えや意見）を相互に投稿してもらう方法を採用しました。

今回は、課題等の取り組みと対面講義への出席の両方の状況を考慮してグループ編成を行い、グループワークを実施する回はグループ毎に着席してもらい、講義時間中に10分程度、事前相談ができる場を設けて適宜、サポートも実施しました。また、自身の考えの文章化を促す授業（第8回が該当）の対面講義では、投稿された意見や考えの概要（全グループが対象）も参考情報として紹介しました。

3 グループワークの効果と課題

今年度の経済学科の1年生にとって、この科目での意見交換は数少ないグループワークの機会であったようで、肯定的に捉える受講者が多かったようです。そのため、自身だけが所属するグループのチームスレッドの設定を希望する受講者の割合が、昨年度に比べて約半分（4名程度）に減りました。また、課題への解答として文章化さ



れた自身の考えについても、他の受講者の考えなどを参照するものが散見されました。よって、直接的な狙いについては、ある程度、達成されたように感じています。

一方、グループワークへの取り組み率は、通常の課題への取り組み率と比べて少し低くなっています。この点は、従来型授業においても同様の傾向があったため、継続的な課題といえます。

なお、授業でのオンラインの活用及び丁寧な教材づくりと事前提供の弊害として、対面講義の出席率の低下が指摘されていますが、残念ながら、この科目も例外ではありません。ただし、教室に現れない受講者の課題やグループワークへの取り組み状況は一律に悪いわけではありません。対面講義ならではの機能もあると認識していますので、今後はその魅力づくりにも寄与するように、感染症拡大防止対策の動向も注視しながら、グループワーク運営の更なる改善に努めたいと考えています。

<引用文献>

西嶋淳(2020)「一般講義科目のオンライン授業におけるグループワーク導入の試み」『FDニューズレター』(大阪商業大学FD委員会)第21号, pp. 3-8.

「観光政策論」

大島 安奈

(公共学部公共学科 専任講師)

1 科目の概要

観光政策論は公共学部と経済学部の3年生以上が選択可能な科目である。2021年度の履修者は88名であり、うち66名が公共学部生、22名が経済学部生であった。

本科目は、「観光」がなぜ21世紀における日本の政策の柱に位置付けられているのか、どのような施策が展開されてきたのかについて、毎回具体的な事例をもとに考察することで、観光政策の意義・役割を理解することを目的としている。本年度の授業の特徴としては、「観光」に大きな影響を及ぼした2020年のコロナパンデミック以前と渦中、その後の時間軸を意識し、全15回の授業のなかで、過去から現在、そして将来の政策のあり方へと問いかけ(議論)が展開するようにしている。

公開授業は第8回目の授業にあたり、「ユニバーサルツーリズム① 多様性とは」をテーマとする

内容であった。今回の授業は、すべての人が楽しめる観光を考える前提として、多様性を体感すること、考えることを目的としたものであった。主なテーマとして、ユニバーサルツーリズムの定義、ユニバーサルツーリズムの需要、バリアの種類、介護が必要な人の旅行の現状（旅行実施率や阻害要因）、多様性ワークを取り上げた。



2 授業運営上の工夫

2.1 授業のなかで意識していること

1) 考える力：まずは学生自身が「考える」時間をつくる

問いかけに対して先に答えや意見を示すのではなく、まずは学生が「自分で考える」時間を毎回設けている。初めは何もヒントを与えず、徐々にヒントや他の学生の意見を紹介するようにしている。そのため、授業で配布する資料には、問いかけに対する回答は載せず、授業時間中に考えてもらうようにし、授業後に改めて **manaba** で回答や問いかけに対するヒントになるため載せていなかった内容が書かれた資料を配布している。

2) 他者理解：他の学生と意見の共有やディスカッションの機会をつくる

他の学生と意見交換することで、新たな気づきを得られたり、多様な考えを知ることができるため、短い時間でもディスカッションの時間を取り入れることを心がけている。「他の人の意見を聞くことで新たに気づいたことがあり、意見交換する意義を感じた」という学生からのコメントも見られた。現在はコロナ禍であるため、感染症への配慮として 2~4 人程度の人数でのディスカッションとしており、1人で考えたい場合はその意思も尊重している。

3) インプットからアウトプットへ：学んだこと考えたことを自分の言葉でまとめる

毎回、授業の振り返り課題を **manaba** のレポート機能で出している。「本日の授業で考えたこと、新たに知ったこと等をまとめてください。200 字以上」とし、提出期日は授業当日中に設定している。授業で考えたことを文章化する過程で、自分の考えを整理しながらアウトプットすることを繰り返し行っている。本科目は期末レポート試験を実施するため、論述の練習としても毎回、振り返りレポートを課すことにした。レポート提出者数は毎回 55~60 名程度であり、出席学生はおおむね提出している。

4) 関心をもってもらう：次の授業につながる振りとしての事前課題（問いかけ）

事前課題は次の授業につながる「振り」と位置づけ、次の授業に出席して「知りたい」と思えるような内容、課題の提示の仕方を意識している。例えば、問いかけとして「オリンピック・パラリンピック東京 2020 開催による効果について、正の効果、負の効果両側面から考えてみよう」とし、回答（議論）は次回の授業で行うことを伝え、学生の知りたいと思う気持ちを起させるような展開

を心がけている。

2.2 授業を運営するなかで難しいと感じた点

1) ディスカッションの機会を設けても、何も話さない、話そうとしない学生のケース

本授業では、問いかけに対して、まずは学生自身に考えてもらう時間を設けている。その際にグループディスカッションも取り入れているが、なかには他者と話そうとしない学生も見られる。改善への取り組みとして、こちらでグループを設定することや考えるためのヒントを出すこと、ゲーム形式の問いにすることも試みたが、それでも他者と話そうとする姿勢がみられない学生がいる。改善につながるかはわからないが、今後座席をランダムに指定することも検討したい。

2) 考えた意見を発表する機会を設けても、消極的な学生のケース

本科目の履修生は3年生以上であり、自分の意見を発表するということにも積極的に取り組んでほしいが、主体的に意見を述べる学生は数えるほどである。配布資料に自身の考えを記載している場合でも、発表となると「大丈夫です」という返答をする学生もいる。その場合、今学期の授業では担当者が学生の意見を紹介するようにしたが、発表しやすい雰囲気づくり、仕組みを考えたい。

3 公開授業に参観された教員のコメントと回答

1) 自身の経験談に基づく説明に関するコメント

- ・「ユニバーサルツーリズム」という学生にとって、関心の高そうなテーマを取り上げて、しかも、具体的な事例を盛り込んで説明されているのは分かりやすいと感じた。とくに、ご自身の体験に基づく説明は説得力があり、学生も「しーん」として興味も深く聞いていたように思う。(他2名)
【回答】ユニバーサルデザインとバリアフリーデザインを説明する際に、自身がケガをして手術・入院生活をしていた時のことを話しました。病院の旧棟と新棟の建物のつくりの違い、困難を感じた経験談を例に出して説明しましたが、分かりやすいとのコメントをいただきうれしく思います。今後も自身の経験談を交えながらの説明を積極的に取り入れてまいります。

2) 考える時間、ディスカッションに関するコメント

- ・授業の中に作業型のグループワークを取り入れ、学生への授業への参加度を高めておられた。学生が眠気に誘われる4時限目ということもあり、効果は高いと思われる。グループワークの際、教室内を歩き、声かけされ、グループワークが単なるおしゃべりの場と化すことを防ごうとされていたが、それでも私語をするグループがあり、私語を防ぐことの難しさも感じた。
- ・「考えてみよう」という問いかけも、講義を進めるうえで効果的で、PPTの使い方、視覚障害の事例、「もし世界が100人の村だったら」という比率の表現も、学生の興味をうまく引き出していると感じた。ただ、「考えてみよう」ということで、他の学生と議論する時間をとった後、元の授業スタイルに戻す際に引きずる学生もおり、メリハリをつけるのがやや難しい場合もあると感じた。
【回答】私語をするグループ、逆に何も話さないグループがあり、グループディスカッションの難しさを感じています。考える時間と講義を聴く時間のメリハリというご指摘は私自身気づいていなかった点であり、今後学生の様子を意識して見ながら適宜声かけなどしていきたいと思えます。ありがとうございます。

3) スライドや配布資料の提示方法に関するコメント

- ・緑内障などにより視野が狭くなった場合のモノの見え方と、通常のモノの見え方の違いを言葉ではなく画像で見せていたことで、一瞬で内容が伝わっていたように思う。個人的にも面白く拝見させていただいた。画像情報の有用性を再認識させていただいた。(他1名)
- ・授業の際には、レジュメに質問は載せるが回答は載せず、自分で考えさせて、後ほど manaba に回答を載せたレジュメを載せるのは、授業への参加度を高め復習を促す意味でも良いと思った。**【回答】**多様性を知る教材として、視覚障害を取り上げ、見え方の違いをスライドで示しました。客観的な視点からコメントをいただき、私自身画像を取り入れることの効果を再認識しました。ありがとうございます。

4) 障がいの表記に関するコメント

- ・PPTで障害のある人、障害者という表現がありましたが、学生の中に意識して「障碍(障がい)」という表現を使う人もいます。すでにこの点について説明済みかもしれませんが、議論のある表現なので、気になりました。

【回答】ご指摘いただきありがとうございます。この点については、障がいをどう捉えるかという障がいの概念の共通認識が必要



であり、事前に説明すべき内容であったと反省しております。この授業の振り返りレポートで、学生から「高齢者、障がい者といっても、元気な人もいます。ひとくくりにするのはどうか」といったコメントがあり、授業の構成として障がいの概念の説明と共通認識をもつステップが抜けていたために誤解を招いてしまったと反省し、第9回目の授業でその点を説明いたしました。客観的なご意見をいただくことで気づくことができ、大変勉強になりました。ありがとうございます。

5) その他のコメント

- ・帽子を着用した者が10人程度いたので、マナーの点から気になった。
- ・全体として私語が少なく、勉強しやすい教室環境が成立していた。
- ・机間まで巡回する方法は、大変よかった。
- ・アクティブラーニング的な授業、是非参考にさせていただきます。

【回答】受講マナーについてご指摘いただき、確かにそうだなと気がつきました。ありがとうございます。その学生にとって特別帽子を被る事情(頭のケガ等)が無い限り、注意したいと思います。今後、学生の授業態度、マナーについても、教育的観点から意識して指導してまいります。

最後に、この度は公開授業および意見交換会の場を設けていただき、ありがとうございました。客観的なご意見をいただけたことで、新たな気づきや自身の授業運営を見直すきっかけになりました。この場をお借りして感謝申し上げます。

「財政学Ⅱ」

鎌苅 宏司

(経済学部経済学科 教授)

1 はじめに

昨年4月に本学経済学部に着任し、「財政学Ⅰ・Ⅱ」を担当しております。昨年11月19日1時限「財政学Ⅱ」の公開授業により、コロナ禍での対面授業ゆえの制約こそありましたが、受講生の立場に立った講義理解の深化について多くを学ぶことができました。この場をお借りして、教職員各位並びに受講生諸君に篤くお礼を申し上げます。

2 どこに焦点を当てるのか

財政学という日銀を除く政府部門の経済活動を初等のミクロ経済学とマクロ経済学を用いて分析する科目の中で、公開授業当日は政府債務の維持可能性について解説しました。

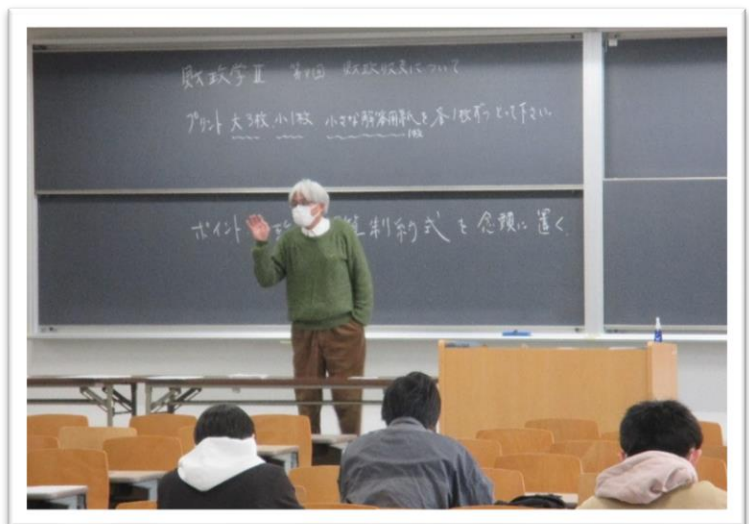
この授業では教科書を指定しており、毎回の講義に先立ち manaba に A4 で 8~10 枚のオンデマンド教材を掲示し、講義時には講義資料として配布しています。受講生のオンデマンド利用を念頭に置き、manaba には教科書の内容とともに、図や文字式や統計データの補足説明とクイズ問題とその解答を載せ、末尾に PDF ファイルを添付することで、通信端末を開けば理解できるよう配慮しています。

公開授業当日は 60 分で前回の復習と今回の内容の解説を行いました。復習ではキーワードや図と文字式の確認を行い、今回新たに説明する内容については、先にポイントや結論を述べて講義の「目的地・着地点」を示し、次に教科書の内容を逐次解説しました。図や文字式は段階的に作図あるいは式の導出を板書することで、講義資料と併せてその内容をより具体的にイメージできるようにしました。

予習をしていない受講生へのヒアリングと参観された先生各位よりいただいたコメントより、反省点として、①講義全体としては配布した講義資料を中心に口頭で解説したが、板書のみならず、より視覚効果の高いパワーポイント・スライド・動画などを効果的に用いる必要があったこと、②文字式を理解させるために変数間の関係を模式図化したり、数値を入れたシミュレーション表を活用したりするなどの工夫が必要であったことの2点があげられます。

3 「鍵を探す男」

「鍵を探す男」というたとえ話があります。これは、理論というものは、それが見えるところ(説明できるところ)しか見ない(説明しない)、あるいは、理論というものは、見えるところから(説明できるところから)見る(説明する)という意味で使われます。



一人でも多くの受講生に教科書の内容を説明できる程度にまで理解してもらうには、おそらく、①教育機会を増やす、②教育手法をより負荷のかからないものにする、③教育内容を記憶に残るよう構造化して類推できるものにする、といった工夫が必要になります。大学教育サービスの「鍵」は、これらを通じて探そうとできそうですが、自戒を込めて申しますと、かつて自分自身が受けた大学教育サービスの提供の仕方、特に、理想とする先人の教え方に影響を受けやすいのも事実です。すなわち、何を教えるのが重要であり、どのように教えるのかは二の次でした。

そこで、教育機会を増やす例としては、オンデマンド型授業と対面授業を併用するハイブリッド型授業を行うことです。もちろん、manaba を用いて小テストやレポートを課すことで予習と復習の機会を増やすことも含まれます。しかし、いずれも手間と時間がかかるため、準備期間が必要になります。

次に、受講生にとってより負荷のかからない教育手法には、初見で直ぐにわかるようなパワーポイント・スライド・動画などによる視覚化や名詞句を用いた文字数の削減があるでしょう。もちろん、講義担当者の洗練された話術も含まれます。私の場合は、さらなる視覚的な工夫が必要となりました。

さて、一般的に毎回の講義時の受講生の反応に対する講義担当者の対応は微妙に異なります。私の場合は、受講生の微妙な反応(無反応も含む)に



対して、声の調子や表情もさることながら、具体的な事例を追加したり、配布した講義資料のチェックポイントを指し示しながら、キーワードとその意味を繰り返し指摘したり、緊張感をなごませるジョークを飛ばすなど、「受講生の微妙な変化に対する動的な反応」としてのマイクロスリップを意識的に起こすことで、受講生をできるだけ講義に引き込もうとしています。

その際、受講生には、学会の定説や通説をまとめた教科書をやみくもに信じるのではなく、また、最初からすべて疑ってかかるのでもなく、その都度、自分自身の感覚に照らす。すなわち、教科書に書かれている内容を「自分事」として「自身の生活体験や社会において自身が垣間見ることができる実例」と紐づけて理解するという、「身体を通じた主体的な学び」を行ってもらうことを希望しています。

そうすることで、自分自身の感覚に基づく理解により頭の中に知識の断片が「要素」として蓄えられ、それらが記憶の断片にとどまらず「構造化」されることで、たとえ「要素」の一部が思い出せなかったとしても構造から類推し、その全体像を思い出せると考えたからです。これが3つ目の教育内容を記憶に残るよう構造化して類推できるものにする工夫です。

しかし、この考えに立つと、受講生が彼らの生活実感や社会体験に照らしやすい教材開発がなされないと、受講生は容易に振り向いてくれないことになります。

4 共通体験の構築に向けて

ここで問題になるのが、受講生は彼らの生活実感や社会体験に照らして講義内容を理解しようと

いう想定が正しいのかということです。すなわち、受講生の主観的な意味世界の存在を仮定し、そこに受講生の講義内容の理解の根拠を求めようとする講義担当者の態度は、受講生たちが抱く多様な意味世界の少なくとも最大公約数的な部分を理解できるという前提に立つことになります。しかし、この前提は正しいのでしょうか。

残念ながら、今日では受講生たちの共通体験はますます少なくなっています。例えば、以前であれば手塚治虫の「鉄腕アトム」を例に出せば腑に落ちた事柄であっても、現代では幼少期より個人の好みで取捨選択され、構築された個の意味世界を「串刺し」できるような共通体験が圧倒的に少ないため、講義担当者は、受講生の最大公約数的な意味世界をつかまえることが、より困難になっています。

そこで、逆に講義担当者自身の生きる意味世界を「フィクション」として受講生にイメージさせる「落語」にも似た手法が有効になると考えました。15回の講義の早い段階で講義担当者が述べる意味世界を受講生の共通体験としてイメージさせ定着させることで、講義の進行が円滑になると期待したからです。すなわち、対面講義という受講生とのコンタクトポイントにおいて、受講生に「私（講義担当者）の意味世界」を理解させることで、受講生の共通体験のベースを押し広げ、講義内容をより解説しやすくできるのではないかと考えたのです。例えば、落語家は和服に羽織と扇子で観客に様々な事柄をイメージさせ、共通体験を与えた上で漸に引き込み、笑いをとります。

私は講義に先立ち、「私的所有制の下での合理的個人間の市場取引」という経済学の意味世界を受講生にイメージさせようと試みましたが、初回は受講生が少なかったことに加えて視覚的な工夫が足りなかったこともあり、共通体験の理解とそのベース作りにはつながらなかったという反省があります。

これらは今後の課題とします。ありがとうございました。



「社会調査入門」 —オンライン授業2年目の経験— 宍戸 邦章 (公共学部公共学科 教授)

1 はじめに

社会調査入門は履修者が400名を超え、2020年度に引き続き、今年度もオンライン授業となりました。今年度の公開授業では、昨年度の反省を踏まえた改善点について紹介させていただきました。

昨年度の社会調査入門の反省点は次のとおりです。まず、昨年度の授業運営方法ですが、PowerPointの授業資料をPDF化してマナバコース経由で配布することと、パソコンのデスクトップの画面を動画にできるソフトを利用して、1時間程度の授業動画を撮影し、それをYouTube経由で学生に視聴してもらうことを併用しました。動画を配信した理由は、PowerPointをPDF化したものだけでは、学生にうまく伝わらないと感じたためです。授業後には毎回小課題を設定し、学生の授業に対する考え方を200～400字程度で記入してもらいました。教室での期末試験を実施することができないため、小テスト2回（中盤と終盤）と1,500字程度のレポートも課し、毎回の小課題と合わせて成績を評価する形式をとりました。

この運営方法で困った経験は、①動画を自宅で視聴できない学生が少数ですが存在すること、②

授業の後半の回になると、動画を視聴せずに課題にだけ回答する学生が出てくること（動画の視聴回数よりも課題提出者の人数の方が多い）、③小課題の提出期限（1週間）を守らない学生が出てくること、④授業の後半の回になると毎回の授業の小課題の提出率が低下してくること、などでした。学生の様子が見えないなかでの授業であったため、学生がどのような感覚で受講していたのか、今年度はそこから探ることに致しました。

2 今年度の改善点

2.1 学生のネット環境や意見をアンケート機能で収集

社会調査の授業ということもあり、授業の1～2回目で学生のネット環境や授業に対する意見を収集し、それを中盤以降の授業運営に役立てる方針をとりました。マナバコースのアンケート機能で学生に望ましい授業形態を尋ねた結果が図1です。講義資料をPDFファイルで送信する形態の支持が最も多く、次いで講義動画、対面授業という順位でした。

また、自宅でオンライン授業を受ける際に何の機器で受講しているか尋ねたところ、パソコンが49%、スマートフォンが45%となり、

私が想像していた以上にスマートフォンでオンライン授業を受ける割合が多い傾向にありました。

第3回目の授業で、授業の分量と難易度について尋ねた結果が図2です。オンライン化に伴い、分量や難度を下げたつもりでしたが、学生にとっては「分量が多すぎる」「難しい」という回答が多い傾向が見られ、意外な結果でした。学生のいうとおりに分量や難易度を変更するつもりはありませんが、学生の受講状況を直接目で確認できない状況下では、学生の意見も一定程度尊重してあげなければならないと思います。

1. 教室での対面授業
2. Zoomを使ったリアルタイムのオンライン授業
3. マナバコースでの講義資料の配布
4. YouTubeなどを利用して一定期間内に講義動画を視聴するオンデマンド授業
5. 教室での対面授業とその様子を動画で同時配信するハイブリッド授業
6. その他の授業形態



図1 望ましい授業形態

Q1 第3回の授業資料の分量は多いですか、それとも少ないですか？

1.3 グラフ表示 ON OFF

1. 多すぎる！
2. どちらかといえば多い
3. ちょうどよい
4. どちらかといえば少ない
5. 少なすぎる！



Q3 第3回の授業資料の内容は難しいですか、それとも簡単ですか？

1.5 グラフ表示 ON OFF

1. 難しすぎる！
2. どちらかといえば難しい
3. ちょうどよい
4. どちらかといえば簡単
5. 簡単すぎる！



図2 授業の分量と難易度

2.2 改善点

紙幅の都合もあり、詳細に説明できませんが、改善点を箇条書きでまとめると下記のとおりとなります。

- ① 授業の前半で分量、難易度、取り組み時間、学生の受講の感想（自由記述）を聞き、授業の方法を許容できる範囲内で実際に変える。
- ② 授業資料は Word で作成し、PDF 化して配布する。提供する情報を 10 ページ前後にとどめる。
- ③ 毎回の小課題に対するリプライを授業の前半に組み込む。
- ④ 小課題や小テスト、レポートの提出期限は厳守させる。
- ⑤ 授業は PDF ファイルを主軸にする。動画を挿入する場合は短く 5 分程度にする。
- ⑥ PDF ファイルはスマホ受講に対応した縦長レイアウトに変更し、文字を詰め込みすぎない。
- ⑦ PDF ファイルは堅苦しくない話し言葉を使用し、息抜きのイラストを入れる。
- ⑧ レポートでは、文献を読むこと、パソコンで作成すること、1,500 字以上の分量にすることなどのハードルを設けて、学生に時間をかけて取り組んでもらう。レポートと毎回の授業課題を関連させて、授業に取り組むとレポートの作成が進むように設計している。



オンライン授業運営に関する説明会の様子

3 おわりに

上記のような変更を今年度加えましたが、学生の授業課題への取り組みは、前半～中盤までは 85% 前後（400 人中 340 人）でした。ただし、後半になりますと、やはり課題への取り組み率が低下してしまう傾向にあります。この点は対面授業の出席率を見ても同様であり、まだまだ改善の余地があるということでしょう。授業資料の分量や課題の負荷を多くすると、取り組み率が低下する傾向にあります。学生の取り組み率を注視しながら、匙加減を調整しつつ授業内容をシラバスとおりに進めていくのは至難ですが、今後も授業運営の工夫を重ねていきたいと思えます。公開授業にご参加くださった先生方からは様々な貴重なアドバイスをいただきました。今後の改善に役立てていきたいと思えます。ありがとうございました。

2 授業アンケート

2-1 実施方法

本学では、学生の学習に対する考え方や学習意欲を把握し、本学の教育活動の推進に活用することを目的に、出席確認システム「Saai-MAS」を用いた授業アンケート（学生対象）を前期と後期に実施している。今年度前期は 2021 年 7 月 15 日（木）～28 日（水）[アナウンス期間：2021 年 7 月 1 日（木）～7 月 28 日（水）] に、後期は 2022 年 1 月 11 日（火）～24 日（月）[アナウンス期間：2022 年 1 月 11 日（火）～1 月 17 日（月）] に実施された。

全面的に対面授業が行われていたコロナ禍以前の授業アンケートでは、学生が授業時間中に教室でスマートフォンを用いて回答する方法をとっていた。昨年度はコロナ禍の影響により、前期は全 15 回授業のすべてでオンライン授業が行われ、後期は第 1 回～第 10 回は対面授業が行われたもの

の第 11 回からオンライン授業に切り替わった。このため、授業アンケートは前期後期ともに、実施期間中であればいつでも、どこからでも回答できるという方法で行われた。

今年度前期は、第 1 回（オンライン受講可）と第 11 回以降は対面授業が行われたが、第 2 回～第 10 回はオンライン授業が行われた。後期は、履修者数などの関係でオンライン授業が行われた一部の授業を除き、前回すべてで対面授業が行われた。これにより、授業アンケートは授業中にスマートフォンを用いて行う（機器が使用できない場合は用紙で対応）方法と、実施期間中であればいつでも回答できる方法が併用された。

2-2 対象科目

授業アンケートは各回とも 1 教員につき 1 科目ずつ行い、その対象科目は各教員がその学期に担当している科目中、履修者数が最も多いものとなっている。ただし、受講者数や担当科目の変動によって、必ずしも毎年度同じ科目が対象になるわけではない。このため、同一科目のこれまでのアンケート結果と比較したい、あるいは別の科目について学生の意識や反応を知りたいなど、教員の要望や判断によって対象科目を変更することが可能となっている。

2-3 アンケートの内容

今年度の授業アンケートも、オンライン授業に対応するよう設問内容を改編したものが使用された。この点については、昨年度の FD ニュースレター (https://ouc.daishodai.ac.jp/uploads/7749a2025f8dbe435899a93f5b0b601b_1.pdf) を参照されたい。

3-4 教員からのフィードバック

授業アンケート結果に対するフィードバックとして、各教員は出席確認システム「Saai-MAS」から集計結果を確認したうえで、感じた点や学生にフィードバックすべき点や授業運営で工夫している点について、「振り返りシート」に自由記述形式で記入し提出することになっている。今年度前期は 2021 年 8 月 31 日（火）に、後期は 2022 年 2 月 28 日（月）に提出期限を設けて回収された。

3-5 結果の開示方法

授業アンケートの集計結果は、本学図書館で閲覧することができる。また、各教員による「振り返りシート」の記述内容の一部は、本学ホームページの FD 活動ページ (https://ouc.daishodai.ac.jp/profile/educational_research/fd/)、「<参考資料> 学生の学びを支援するための取組み紹介」の<取組み例>に掲載されている。

3-6 今後の展望

FD 委員会の授業アンケート検討ワーキングでは、随時、授業アンケートの実施方法や内容について検討を行っている。今回は、授業アンケート検討ワーキングの宍戸邦章教授による、新たな授業アンケートの雛型に関する紹介文を掲載しておきたい。



授業序盤での授業アンケート
— マナビコースのアンケート機能を利用した雛型の紹介 —
宍戸 邦章
(公共学部公共学科 教授)

1 はじめに

本学における授業アンケートは、教員が担当する科目のなかで、最も履修者が多い授業1つに対して、授業終盤の14回目に実施している。授業の半期化に伴い前期1回、後期1回の実施としている。2020年度からのコロナ禍では、オンライン授業も含まれることから、オンライン授業でも尋ねることができる9つの調査項目に限定し、約2週間の期間、自宅から回答できるかたちをとっている。教員や授業運営に関する学生の評価が調査項目の中心である。

授業アンケートの結果は、各教員に開示され、教員は結果を見ながら授業の改善に関する振り返りを行ない、教務課に提出することとなっている。授業アンケートのワーキンググループでは、その振り返りの内容を検討し、今後の授業アンケートの在り方について話し合う機会を毎年度設けている。

各教員からのコメントで毎年度散見されるのは、「14回目の授業終盤のアンケートでは、その年度の学生からの評価を知ることができても、その年度内の学生に改善策が反映されない」という点である。コロナ禍で教員はマナビコースの利用が増え、「アンケート」機能で学生の意見を容易に収集できるようになった。わざわざ出席確認システムの「授業アンケート」を使わなくても、学生の意見は短時間で簡単に収集できるようになった。

授業アンケートのワーキングにおいても、学生が使い慣れているマナビコースへの切り替えの意見が出たことがあったが、以下の理由から大学全体で行う授業アンケートは出席確認システム経由で行う方針を維持するかたちとしている。

- ① マナビコースではどの学生が回答したのか教員が特定できるのに対して、出席確認システムでは学生の匿名性が確保されており、教員や授業に対する学生の率直な評価が期待できる。
- ② 出席確認システムでは、各教員が個別に設定しなくても、一斉に同一形式の授業アンケートを行うことができる。
- ③ 出席確認システムでは、データを一括で回収できる。
- ④ 出席確認システムでは、同一形式の結果表を教員に一斉配布できる。

2 授業序盤でのアンケートの可能性

とはいえ、やはり教員からの意見にもあるとおり、その年度内の学生に授業改善の恩恵がないのは問題であり、学生の授業アンケートへの回答意欲にも影響するだろう。教員に対する評価ではなく、授業序盤での授業運営に関する学生の意見収集という目的の調査なら、マナビコース経由で個人が特定されることがあっても学生は率直な意見を表明しやすいと考えられる。教員のなかにはすでに授業序盤での学生の意見収集を行い、授業の中盤以降で改善に取り組んでいる事例も散見される。まだマナビコースのアンケート機能を使い慣れていない教員の存在も考えられることから、FD委員会としては、このような取り組みのサポートとして、授業序盤でのアンケートの雛型を作成し、

紹介することとした。雛型では、オンライン授業版と対面授業版を分けて作成している。

2.1 授業序盤でのアンケート例（オンライン授業版）

このアンケートは授業の序盤で皆さんの意見を聴き、中盤以降の授業の改善に役立てるものです。回答の内容は成績に一切関係ありません。安心して回答ください。

Q1 あなたは、自宅でオンライン授業を受けるとき、主にどの機器で取り組んでいますか。

1	2	3	4
パソコン	スマートフォン	タブレット	その他

Q2 あなたの自宅では、定額制の Wi-Fi 環境などのように、インターネットを十分に使える環境が整っていますか。

1	2
はい	いいえ

Q3 今回の授業資料の分量は多いですか、それとも少ないですか。

1	2	3	4	5
多すぎる	どちらかといえば多い	ちょうどよい	どちらかといえば少ない	少なすぎる

Q4 今回の授業の内容は難しいですか、それとも簡単ですか。

1	2	3	4	5
難しすぎる	どちらかといえば難しい	ちょうどよい	どちらかといえば簡単	簡単すぎる

Q5 今回の授業の資料を読み、課題の回答を終えるまでに、おおよそどのくらいの時間がかかりましたか。

1	2	3	4	5
30 分程度	1 時間程度	1 時間半程度	2 時間程度	それ以上

Q6 授業運営の方法について、要望があれば自由にお書きください。（自由記述）

2.2 授業序盤でのアンケート例（対面授業版）

このアンケートは授業の序盤で皆さんの意見を聴き、中盤以降の授業の改善に役立てるものです。回答の内容は成績に一切関係ありません。安心して回答ください。

Q1 今回の授業の進め方は早いですか、それともゆっくりしすぎていますか。

1	2	3	4	5
早すぎる	どちらかといえば早い	ちょうどよい	どちらかといえばゆっくり	ゆっくりしすぎている

Q2 今回の授業でノートはどの程度とれましたか。

1	2	3	4
十分に とれた	ある程度 とれた	あまり とれなかった	ほとんど とれなかった

Q3 今回の授業資料の分量は多いですか、それとも少ないですか。

1	2	3	4	5
多すぎる	どちらかといえば 多い	ちょうどよい	どちらかといえば 少ない	少なすぎる

Q4 今回の授業の内容は難しいですか、それとも簡単ですか。

1	2	3	4	5
難しすぎる	どちらかといえば 難しい	ちょうどよい	どちらかといえば 簡単	簡単すぎる

Q5 授業運営の方法について、要望があれば自由にお書きください。(自由記述)

3 おわりに

以上が雛型の案である。マナバコースのアンケート機能で「インポート」を行えば、どの授業でも瞬時に行うことができる。マナバコースなので、回答した学生の特定は可能である。実施は自由であるし、調査項目を統一する必要もないため、これをベースに各教員が内容を自由に変更することもできる。オンライン授業版にしても対面授業版にしても、設問の中心は「難易度と分量の適切さ」である。この情報は、実際に中盤以降に改善するかしないにかかわらず、教員側は学生層と授業内容のミスマッチを防ぐために把握しておくべきだろう。対面授業の場合は、これに加えて進め方のスピードの適切さと、ノートが取れている程度を尋ねている。オンライン授業版では、学生側のネット環境や使用機器の設問を加えている。

この雛型については、今後検討を重ね、FD 委員会の了承を得た後に、教職員共有フォルダなどで雛型のファイルを共有し、使用したい教員が自由に自分のマナバコースでインポートできるようにできれば便利なのではないか、と考えている。



3 FD研修会

今年度は、就業力育成委員会とFD委員会の連名による「就業力育成支援プログラム報告書の報告会」の開催が2021年9月1日(水)に予定されていた。就業力育成支援の取り組みは教員の教育活動と密接な関わりがあり、本学の取り組みに対する理解をより深める場を教員に提供するという点で、この報告会はFD研修会に準じる位置付けがなされている。

しかしながら、新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言が延長されたことに伴い、感染症拡大防止の観点から報告会の開催は中止となった。

4 大学院FD活動

本学における大学院FD活動の一環として、2021年10月に修士論文中間報告会が開催された。以下は、大学院FD検討ワーキングの初谷勇教授と和田伸介教授による報告である。

「2021年度 修士論文中間報告会」開催される

初谷 勇（大学院地域政策学研究科 教授）

和田 伸介（大学院地域政策学研究科 教授）

2021年10月16日（土）10時から14時25分まで、本学6号館2階623教室において、2021年度の大学院地域政策学研究科「修士論文中間報告会」が、感染対策に配慮しつつ対面により開催された。今回の報告者は、地域経済政策専攻4名、経営革新専攻3名、計7名（うち留学生6名、社会人1名）で、その氏名、指導教員及び論文題目は表1のとおりである。

表1 2021年度修士論文題目一覧

地域経済政策専攻

氏名	指導教員	論文題目
張 乙戈	閻 和平	高齢社会と中国のバリアフリー推進政策について 日本からのインプリケーションを踏まえて
于 泓洋	加藤 慶一郎	寝屋川市の地域通貨「げんき」に関する研究 ーデジタル化に注目してー
AKHSA MEILIANA INTANI	初谷 勇	インドネシアにおける中小零細企業支援の仕組みの革新： 支援組織の民間非営利組織への転換
青野 英世	石川 雄一	地域スケール都市システムの変遷に関する研究 ー兵庫県内の都市システムおよび神戸市の中枢管理機能の立地変化を中心にー

経営革新専攻

氏名	指導教員	論文題目
DINH BAO LINH	加藤 司	ベトナムのコーヒー市場の競争分析に基づくカフェチェーンの 事業開発について
JULITEZI SHAWULIEBIEKE	梅野 巨利	カザフスタン消費者の日本に対する原産国イメージおよびカントリー・ バイアスと購買意図の関係に関する一考察 ー日本化粧品を対象にー
黄 浩晨	松尾 俊彦	日本のモーダルシフトに関する研究 ー中国への示唆となる点を中心としてー

大学院教授会が主催する修士論文中間報告会は、当該年度に修士論文提出を希望する院生が、修士論文の構成や内容等を報告し、さまざまな専門領域にわたる大学院担当教員から質問や指摘を受け、助言を得ることを通じて、各自の論文の充実や一層の洗練に役立てていくことを期待して行われている。報告者以外に参加する院生にとっても、次年度以降の論文提出に向けて、研究計画や取り組みを点検する機会ともなっている。

今回も、各自15分の発表に対し、出席教員からは、地域政策学研究に相応しい主題設定や、研究の目的・成果の明確性、先行研究を踏まえた独自の視点に基づく考察、研究・分析方法の妥当性、さらに論文構成や文章表現の適切さなどを備えているか、また、仮にそれらが不十分な場合には、

どのような改善や検討が求められるか等について、院生の研究目的に照らしての質疑や助言があいついだ。

いずれの報告者も、力のこもったプレゼンテーションに加え、さまざまな角度から投げかけられる質問を真摯に聴き取り、懸命に応答する姿に、論文完成に向けた意欲と熱意を感じさせられた。



報告の様子

(上段左から張さん、于さん、JULITEZI さん、下段 LINH さん)

今後とも「修士論文中間報告会」が、「博士後期 中間論文・研究成果報告会」とともに、大学院 FD の一環として、本大学院に学ぶ院生の相互研鑽と研究能力錬磨の契機となるよう、一層の充実を図っていきたい。

《編集後記》

早いものでもう年度末です。年度末と言えば、我々FD ニュースレター検討ワーキンググループにとって、FD ニュースレターの作成に追われる時期です。今年度も試行錯誤を繰り返しながら、関係者の皆様のご協力のもと、この第23号を完成させることができました。これで心おきなく新年度を迎えることができます。世界的にも暗いニュースが続く昨今ですが、次年度は明るいニュースが増えることを期待したいと思います。(陽)

大阪商業大学 FDニューズレター 第23号

発行日：2022年3月20日

発行：大阪商業大学FD委員会

〒577-8505 東大阪市御厨栄町4-1-10

Tel 06-6781-8816 Fax 06-6781-6156